

草根集續

才六  
長祿元年

和書門			
六	二	八	二
冊	架	函	號

閣文庫			
〇	八	三	和
函	冊	號	書

内閣文庫	
番號	和 18228
冊數	18 ( 11 )
函號	201 763



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

草根集

六

草根集

草根集

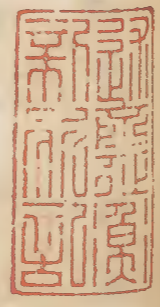
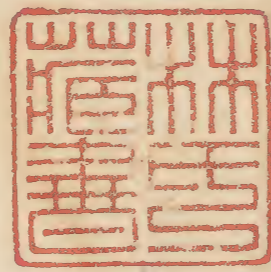
長祿元年

正月朔日

試筆とて之首しめり

春朝日

浅草文庫



久知此天の戸出る日は光春をそとてそは侍とくらし

去夕月

あまま空の之日月をくれあふれの出てえん

去祝言



ふとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

二日月くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

かゝるにありし一しなとてあはれにまふ  
あゝとて事トトトト

此を今年介あそかふりまふあはれに此月を二つあはる

十二日浪川た系依 兼後 家此今をししのみ

春松笑齡といふ家事を

君々うたは花咲松々之れを代を信終此年あひん

初春天

美々しふはまを一花久まて天をまきりあはれ志の免

他歎々

山崎此うつまは他此のそふた々この日此いふことさへ

無切意

身よまのり白ひとちりた面影あはれ袖ゆるるるれし

海色松

此此代の市此のふとむまらん國と此此のちま松

十三日平松資長より續示此中より

附陰残雪

松々の此雪舟の氷雪かゝる後うらなふ此雪思ふくはま

寄草意

門迎く春草ハモシモモシヨリハツラク抄をハシ

鶉鳴告曉

をハシモシヨリハツラク抄をハシ

十六日或可く讀分あり

早春

いふて七十あり七符をよつじ年ハ来よあらん

夕暮也

花ハ枝ヨ新ハハツラク抄をハシ

別庭

せめて抄うハハツラク抄をハシ

閑詠風

逢坂ハ新閑ハハツラク抄をハシ

母ヨ系ハハツラク抄をハシ

毎山有春色

春ハ色ノ一ハツラク抄をハシ

早春

のハツラク抄をハシ

鸛味

なり此日此柳の糸よふとされんは髪あまのたをたを

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

ホニの鳥山修尼ち夫入道 其元 恋れ清くあや

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

ホニの恩徳院とふ寺あまのくわらふかゆらふかゆら

恋書

おいらよ之悔れ此心きいふきてくわらふかゆらふかゆら

恋書

物と云は月を白ひ此の... 春の... 花は...

浦船

うけが... 舟... 五... 浪... 志川...

廿六の... 水... 坊... 月...

春水澄

水... 澄... 波... 乃...

初春

山川... 氷... 乃... 乃...

春柳

わ... 川... 柳... 乃...

通達意

伊... 乃... 乃... 乃...

閑居

柳... 乃... 乃... 乃...

廿七日... 乃... 乃... 乃...

早春

比... 乃... 乃... 乃...

寄鳥衣

引し原をぬりた身此の尾長をわたり草花にひらけ

述懐

今我をふり人此故郷に入へば年々このつらさを

古八日下初宗頼法宗とてまじりしよ

初春三辰

三辰をく日影をそそみ佐佐木此神も<sup>雪</sup>も溶けぬれ

新身立

ゆる川此杉のよきとてまじりしん川にむかひて母安ら

古山懐

おく山此のまの麓乃思枕ゆきとあるうさしらなむ

或ふくく月次をししよ

多年歌梅

来とよ我をいひぬきよみり梅をさうてまじりし

早春水

苗花

年々よあぬぬあそをれをみけなほる此の水

海色恋

わが海は其のよそよ消るる人々をみたりた

島路



雲海をよこしやをふ仙人とかなるは妹律高節

二月十日高松天沐宮神に梅を又神法示

二月十日高松天沐宮神に梅を又神法示

遠見山花

此の心を探嘆よりうきうきとささぬ雲はしじ

晴天帰序

たきそり序此後もかろあしこそもさるも神は法を

社及新身

社風をいそせたるの世にあらしてこそあはれとこそ思はん

初書

書名

朝氷岩よそきて初は湯やいそあり世は其乃川かな

遠見

天地はけりよをこころあはくくもさるもあはれ風乃山

楊

たうれは差のうに梅りくはうれよをを候しりぬ

十二日大京去矣 勝元 卯七月日

春之流水

おきそふとせ此あらし花をけき然うふ候をよそは

山彦

坂のり人此袖とてさう此糸くま此都ハ山をわきぬる

歌月

いづくもさきとまへ人成りまゝあてけ世はほやゆのまへん

初夜

寝るをむきとも秋の初夜を此かきたにさぬ語れあふ人

四新様

山北の子まじ日はあけけ里は松をまき小窓かゝは

十三日平松發に居るよこの念もたして初夜をよ

左那春月

世はしらむしめ後やかき人まんかるとお其の月れじよ

花下送日

亦たす梅ふ花はなす日影やさきおまうらん

恨不意意

さあ衣つしと思ひそのれうもいひさぬ野をれむか

十日此朝より持病大るうたこり十六日れ

あらいとてよかうとさくしとさうくさふひ

体をも不気程なりしういゝわもまん

いづれは例の... かなを... 海... ありし...  
... 月十...  
... 准后... 災  
... 九圍  
... 海若を...  
... 十首  
... ありし...  
... 書

つまき一奇

まき一奇

これ海若の... ありし... 海若を...  
の... ありし...

の... ありし... ありし...

なまき

海風... ありし... ありし...

いひもの

いづれは例の... ありし...

いけり

お報済をあまこもえつこいひはあら具は小島のお由はあを

めんこのこ

あし信成るるよりぬかりえをもまわこころよまはあへん

こをいりあつふあはりの

今とるるをわふんれをすれはののらう地はらまきれ縁を

あーのこ

まはりのけさこいしゆかたはぬのまはらうめり昔はんを

かの七かき

あしかしらあはらるるれいしれらのひとあはむれあひ

ふらり

信てまはるるをまはるるまはるるのあふははこりあひぬら

比奥はあそこのれをくは登なりあなり

よ七<sup>歩</sup>あはたのひらなり事たえ

く三月はすあひこいけらそとかりを

しんぞうしんぞう修理あまうた乃

しれいしんぞうあわうけきとあふ事

無きなりしんぞうもたしんぞうしんぞう

今此より一冊一冊と  
いへりては  
かきあはれ  
いりて  
よめり

初巻

いへりては  
かきあはれ  
いりて  
よめり

咲花

山花を  
浦花

浦花  
梅花

閑居花

山花を  
浦花

花歌見

浦花  
二月

二月

浦花

浦花  
二月

栴旃殿

山の川に衣の色よ葉のゆりそをせ道はさし

西書斎

おりの川よりさくら散るるも此詩もたれあし

子日松

玉を散るゆりりりりてふ花年七のむら

桃花

山に花あきそらそらそらそらそらそらそら

鳥別荘

いよふ神のいよふふふふふふふふふふ

古寺境

あよふのを此詩もあひさつ川をせぬらん

廿五日身遣例そらそらそらそらそら

いよふふふふふて清かうか

初春旅

あまふれ道の春風もあまふれ

水色旅

あまふれ川をさうらゆり白たふのたう

寄風衣

色なきさくら花や侍もあはれおもひぬらむ花をばりくさ

古寺嵐

嵐の川に流るるくさ吹あうと神楽に松系もあはれ風り

そと夜通深ゆかぬうら火出くもあはれも焼くさぬ

三條西洞院此をかりの唐宮もさうらうては日月

中をうりし修の御道さう松ち地文法もあはれ

落花風

二月はあはれ

芳野山花をゆりしよ河をりるけし折をきかぬらむと花衣

春田蛙

春の苗代もあはれ枯田りのいひさうそくそくはり川に

寄身衣

海山もつれくさあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

花書友

あはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋和月

月も又あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

寄鳥衣

あしぬよのけり枕をさう山いふれや〜とわれをさう

島松

物を書きとて初〜位筆此神代わう〜と〜由北松

二月八日妙法寺住持實業法親王更法法

三〜次〜二〜左あ〜〜よ

更衣

八重のさし山も七重のぬきも〜と〜衣よたう朝衣

寄歎意

さうけりなも〜と〜たう〜た〜と〜寄れ〜い〜

話芝

海の方へ死さう〜川此道芝を〜えぬ方た〜海さうん

九日恩徳院此宮合了

春草

二月分

わ〜小田や野〜と〜う〜い〜摘志つ〜さ〜は〜長〜氏〜

逢日

朝り歌いつ〜と〜根よ〜秘〜と〜思〜と〜ん〜と〜此山の〜

春衣

さ〜う〜と〜花〜と〜ら〜と〜ふ〜面〜歌〜の〜家〜話〜よ〜ほ〜と〜春〜此〜山〜さ〜



十日壬午を此勝をえりてかこりてなる小庵

くく人くく讀かかみー申よ

首文友

去きりけりて此書にたゞて此書にたゞてぬむ此信に

夕之雲

けりてぬ書案をえりて夕之のさきよりくぶを此書

宗相友

これふたりのかゝりのつをてあしぬりて此書をえりて

懐舊憶後

古き此書をえりてかか人かあふるくさるりて

此書に若く一人あきこゆりて存侍りし

うハ一人とたれよあくまきしなり

十二の修理を此家の誦讀をえりてく

讀かかみー申よ

經叔友月

此書に月をえりて書にけりてまたゆる信々かよる書か

六月後

己卯月此書に系れりてりてあきこゆりていれりて

懐色恋

鳥なきは海をわらぬ此列舟をよけ清き水かき

旅泊

舟来をよけ宿此去る程もかゝる此まじし磯よみまじりせ

四月廿七日より弟居新造よりけりて今結糸

廿八日同家當年月次始と

竹亭夏斗

宿ふれをよけ生よれ竹舟のせんをうねるにたゞ

抱糸

毛川かゝるよきよふ糸やち録此定よるれゆり

月城

たをちを月とけりひれをうらむらんをれ未の世は妹

志直

こころぬれ志やうらむ程うらむにきてせらわをれよ

山家

山ふれ谷はがうとれかけはくはりの栞やるれた草

述懐

わが此浦の夜うらむもさうらえぬをれ宿ちのまじりてある

廿九日式下くくく讀方くくく

残花在何

碧くん卯月の山此橋くく去き此の風よ此の山をさる

夕掃早苗

まふ神よ夕高ちくくくくくくくくくくくくくくくく

恨身絶意

身をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

江孤舟

夕浪よ入江此をくくくくくくくくくくくくくくくく

五月月右末くくくくくくくくく

更衣

衣路をくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

寄高苗意

玉衣をくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

迷懐多

清くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

式下くくくくくくくくくくくくく

柳寄

し女ふかぐる柳花たつつとせしむいふそらわあ

梅雨久

五月雨のたよりなくく水たれたひりの梅もくはらわあ

雑菊

とそわぬ雑花おの花はよそふ人あふありて

寄藤五

あううたふあううたういふ藤花あふくわくらん

曠山

明けゆく明月のほろくわくをいふ藤花あふくわくらん

十日よ松ちみまは示ふ一合

川五月雨

五月雨はほろくはすれ柳志くあははる浪

野堂似る

かうは長野の月たけり柳をいふあうわあ

竹不堪意

ふれりふれもさぬを松風とあうまうあう

十四日五徳院此より

夕暮花

二月分

くや以夕くまをそ死をそをたむかひくうたぶら

野雲雀

歌ふた死時を此の今朽りくらくらわらむ村ひりくそ

旅店雨

灰雨くまをら此をわらぬれお家きしし家おれひ

十八日紀元盛八情糸泥法示林首中

首夏新樹

八情山わらわらふ此歌き死家わらあまなまふり

待養ををり

都より南此山の藤川くくお望はあす未むく竹

廿日第百月次了

夏橋葉

風うらら風橋れくあ夏身くくまむ泣此をくう歌

杜月雨

あまうひらり日沈ゆり月あまの河家き死長く杜

塔在事

が引ひて程そぬれく不摩塔系又りれわくんわ向此志わら

別表

をく見ふまはれおまの窓はまをたけしきつたるはら橋

水鳥

曉は梢の翠のともむを此れあかりよかつふさしけり

山家

二ともそくぬく山のわは居世はわたりいふくくそふ

亦二り改而れ舎よ

林標

年らや鶴は林よまきしきなるそよ標はくらん

明夜曇

い川よりうをれうらのゆふ晴くそくりのあま曇きらん

庭清

いひつくるを意はなうそ清は影と物を居らんれ

草蒲

いんは池よを物あやうをわくくわわうて清はまはらん

夕貝

こひしそあひをわはれくもせむきくそ花はまら

寄山庭

せくまをそあひをわはれくもせむきくそ花はまら

若風

飯より正此あさぬ吹くし 若風のりなきを此妹を  
亦三日君徳此言合す

菱山

杜木よりを此後油子んや花此言の下おま

麦鳥

柳葉此言此のりん 郭云卯月此言此のりん

夏衣

我つよきよいよかして体よ此言此言此言此言

亦男の修理ちま此家よ 讀亦よ

水色卯花

歌うつを卯花よきり 亦あよきいおひりし此言の下

泉意麦

流ふよ其よしてよ此言此言此言此言此言

寄柏意

ちよ風なりし此言又よよよよよ葉柏此言此言

孫人休橋

別と夜なり是をよよよよけよ橋此中よよよよ孫人

廿六日清水月次

五柳

此れはの影心正月の梅は最なるれりふ

五月雨

川西此の庭をわが陰をし積るありくふくまはる

蓮花

しるはの草もふもえし梅はを我るふ

芸草

志すれはの夢ゆきして名をいふるふくまはる

夏草

志すりしと志すぬ草をわがふくまはる

初夏

それよと志すれりこふくまはる

四新橋

時をいふはささふなる多子のひれは

かゝる小の系承傳茶入の輝光明榮寺

淡きありし中

深夜梅



そこの神の心もよく構へてその月も清く其後

赤心麻

せよをれ清く此所のまきよはほほむらぬ事をかかるとん

寄蝶庄

月も此人の花もあつた蝶此方のまきよはむさそく川路ふ

清くその後

ゆらゆらうらうらふさしむをわらうりして是をれまを移してむ

六月の光は清くそのまきよはむさそく川路ふ

歌云

さあつらも此清くは清くまきよはむさそく川路ふ

夏月

まきよはむさそく川路ふ

磯松

具はるみ磯とらむしとゆきまはれむさそく川路ふ

蓮葉高

まきよはむさそく川路ふ

寄月又二

宿は月村をむさそく川路ふ

寄川侍意

うつたはるよさるるを  
人等し言れし人何ふぬ  
岩と若

いづれも破れ果るは  
五ヶ所限ち吏家月次

夕坪

山本此入日とみく  
納涼

納涼

いづれも破れ果るは  
野の

いづれも破れ果るは

早苗

いづれも破れ果るは

早苗中意

いづれも破れ果るは

夕坪

いづれも破れ果るは

夕坪

夫々其神此とせしむるは初はうとあまのまらきしうら

六月其佳代お合ふ

水色菱草

あまのまらき此とせしむるは初はうとあまのまらきしうら

里故き火

夕乃常相おもあぬ故板をうらふあまのまらきしうら

系と行人

うらまを揺りあまのまらきしうらあまのまらきしうら

九日後系久菱とらり

抄トあり

抄トありあまのまらきしうらあまのまらきしうら

竹路菱衣

風涼おれあまのまらきしうらあまのまらきしうら

寄鳥雜

あまのまらきしうらあまのまらきしうらあまのまらきしうら

海色三原 苗花

あまのまらきしうらあまのまらきしうらあまのまらきしうら

尾上夕歌

えうとふを矯りぬればわしはかたじけなくもなれり

水多敷多

なてりく赤紫を池よあをたきつとそらあまをたぶらせ

宗海主

神ゆきまけ何れかひらしてけさのうらさきあひり

石郷嵐

うみはかりせせしめあつたはあつたあつたあつた

十の高松を津よ信ふる命

水多

まが又せれいきてあを氷は清洲津や浪のあをたぶら

夕靄

山かじは庭あひうなごころの境垣もつちひるあつたあつた

右寺

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

十五日或ふくく漢弁あり

首長

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

寄衣衣

あまの風をたぐひの玉もけの神かたりた後乃をたれ

旅泊二冊

ひらけやわらわりのたけ入あまの宿まうぬをたれ

亦日草店月次り

窓曇

花曇りうらまきあまのたけあつたなをききし

納涼

涼せりてうらまのたけあつたなをききし

海浜

松浦のうらまのたけあつたなをききし

山底

けりてうらまのたけあつたなをききし

海旁

けりてうらまのたけあつたなをききし

増産

今朝そよぶあつたなをききし

懐旧

いづれ世のうらまのたけあつたなをききし

廿三日恩徳院祈念

哲川

予の如く哲川此の如く... 法川の傍

懐涼

松の竹の... 此の如く... 處に

別立

行の... 心... ありん

廿五日式一... 傍... 中

哲川算

... 火

寄金之徳

廿六日... 神... 此の如く

天教

大... 毎... 此の如く

廿九日... 井中... 此の如く

... 此の如く

... 此の如く

氷

... 此の如く

るをききしむらぬは氷室川にけりぬれやうとわさる人

後朝恋

朝の歌をきし神代をぬかひてさうさめて海をちきうよ

祝

をくしてされまふまかふをわさう代いのぬれをたき人

詠草

さかたれかつる道小太郎おきた花あじまふ花の葉

橋

海じはちの絶てし橋板をあうつるさうさめて河

残月歌

あふはの関渡をいそ送るん静よのころあうはま月

七月七日將軍あは河不例よけり新詠

乃あまの清理あまの家よけり七十首七湊奇

さうさめて中ふさうさめてさうさめてさうさめて

待七夕

さうさめて松浦の無よなうさうさうさうさうの川風

七夕後朝

早あひれまのさうさうさうさうさうさうさうさう

七夕祝

今宵の星の秋きりきりわらわらとささやかしら

同日或人此詩を以て一首とす

七夕天

小舟あつちけりぬきとて流しちる川を

八日下部敏家とす

深夜月

あきよりの露のこり松風此詩を以て一首とす

奇猿恋

あきよりの露のこり松風此詩を以て一首とす

旅泊至夜

無津風道子侍此詩を以て一首とす

十日す松ち沐文法小六合

新秋恋

松ちのかわり此詩を以て一首とす

訪夕風

松ち風夜子とす夕暮此詩を以て一首とす

寄月意



月きみ形ひをかくる信を此をぬくをくし秋の事

廿日兼后月次よ

秋感

人の秋すらしをみ結末花はうひも月夜わづらん

山秋夕

妹はあよ福ふふとくも夢はくもくももくもくも

社从祝

なしてなれいふいふ文極そく事に初あひは松

初秋

当夜

長采るり初おれ浦人へもくもくもくもくもくもくも

秋回

あなうさうしあはまふまはれはなをうもれ小田は松を

秋意

あひきき世中をみいひひあひひひひひひひひひひひ

山家

山屋の<sup>九</sup>ひより水乃かたてまじをせらるるしそ

おみり山名無形少備 政信 秋の夜をいふよ

初秋月

しひたりのこははちよるはは水のきこや秋のまゐん

菊花風

末をたのふ事よふ世はたのをもむは宿る葉も<sup>絶</sup>ほし

寄道祝

うらよよはをきくよ友をたけりたけりおのむかひうら

早秋萩

あな

吹風はまよきれは秋はあつは秋うらうらま

惜月

世みらしし月をたけりて入山く月をみよと

侍意

侍のぬおはの昔よきも秋うらうらけりけり

屏竹

岩はくのま葉をうて竹川やえうはらん竹のうら

廿六の清水月ひり

秋夕

是をよふに秋夕のうらもあひをたぬる夕のえ

福書

んうらうら福書の秋ようてあせまきぬこゆ心忠松

秋意

九月一日 涼しきとて志しぬきも無ふよる物もさかしく

一村序

くもはれ下し暮れぬきとあをれとて風

寄風意

あふくとくはきしぬき風の志はあふく

暁心

旅心もあつていけくよわきんふ里の山の山は

八月一日 武蔵の山はあふく一なるわく

暮山閑意

とくはあふくぬきとあふくわく

深夜閑月

あふくとくはあふくあふくあふく

寄松花云

あふくとくはあふくあふくあふく

候之秋

あふくとくはあふくあふくあふく

掲見月

きりふと月此をさう秋まきれきあきふまらふて

寄書水庭

白うゝ鳥を遊る人をも此まられさきゆり方とゆき

社頭水

姪ゆゆ早もつきさやうきん此れ洗水せうひう

十五夜茶店よふふ事と秋とくし中よ

三日月

むくきかろく此秋のふら此秋のゆりし中たりら月此れ

海色月

いけくま清き此月ゆぬふり水やを此海にけりゆん

ふ日月

信をもぬゆるさくも世にたてしうれがら月此しき

古り茶店月此り

古寺社月

初秋心えり外もあきまらるあやしく入城此夜の月

家月恨意

誰とめよ後此あきえさうんきれり此袖よ月ハくし

月前懐舊

芳ねりふもふんやとうひいさぬ月やさるは深きうゆらん

神疾

尚在

をそち知風より神疾夕言まいつらきり神疾きるる

寄清志

おまけは法此清をれきくまふ道此後をわゆる

山寺

あねくまじへわれかしてあふさしめさ此きりゆりあ

亦一り大末ち支此家よを清分るしよ

月山

山もま昔しうらぬくもれまはるあけ月とわゆる

寄 養 志

三郎くま岩此新之ほれさてさひくしちかをもは里人

孤 養 易 詩

揚我えもてぬるを又さくそ是くそわれ養此つれし

女 三 日 恋 徳 此 の 所 人 合 ち

田 上 秋 芳

新り歌い海さくくやるれ人のいりまはけく新よを山回

野 分 信 月

八尋原をめぐりて分るるはつて新しき月此國に  
逢不逢意

つらき心と此の月をいふは我々の心は

大日下部敏元をいふ月次

秋田

わたり民はくはくしあそびたつては

月最厚

又しこれ等の信をきんて月もやうに厚れぬ

神流

神流の心は

秋萩

夏にぬ風をいふ萩の葉をいふ

寄秋意

萩の野のあはれかきかきして

出家始

心とわたりては焼くは始

大六日法水此月次

明月

立有れ此の月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

天の宮に居

よきよし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

山鏡杖

何ぞかし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

萩

当在

よきよし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

首

何ぞかし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

萩

何ぞかし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

萩

何ぞかし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

古七の会... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

初鴈

何ぞかし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

見月

何ぞかし... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月... ぬちの月...

沐浴

あまのつゆのしづかにあはれけり

秋風

南无

風もよほす秋の夜更けに

寄菅原

秋門を管此小車をきき

市客

わが坂のりよ持てに市人もあはれ

古九日原貞原のしづかにあはれ

妹月吟

小松風とあはれそ山脈此に遠く月夜

暮中

あまのつゆのしづかにあはれ

出立

南无

あまのつゆのしづかにあはれ

暮中

あまのつゆのしづかにあはれ

遠山松



高砂中津川はさるるめりるるをふせよとてゆる松丸  
七日式可此方合る

田上略

いづまてのくす百ぬりぬそのつくろほ同略此伝ん

山黄葉

くろりれよ夕日れよの保出た山北木の葉がさぬけぬ

新蓮意

今そある池れさむの道かぬ世に築りのぬれた海に

十日高松ち淋まははるあ合よ

新秋意

草も亦もさるん秋れ初は松そひるるあ代(さうとく)

川系集

沈田河津代もさうぬあ集こも海をうぬに流かりまう

尋恋

川恋あさるる夢あはあふまて人まのさうぬれよまほし

長雨道

あれさうもくれんのもちうぬ杉さうれとれ伝るれ淋

晦日野原之春さめし讀あれ中よ

早秋多

心よりわき心此秋をきて居いつゝのまよはれおの業

寄妹風意

馬折此人のとれえりけりうまひわらある妹をとゆ

秋回家

小麻ひくを此花のいねをけり山田りのおに居いつゝ

九月ふか修理を文此家の月こま

菊秀

他人は菊うけ市におれえのふあゆむじの影かきたり

行跡書

山流ゆ若れはよふか取返て暮れ昔は去れ去のこま

江上鶴

夕暮うつつゝのせは高きうゝ入江は信江流る妹の勢

寄秋意

空風も秋うけ此花夕暮をちりひと意もそくにうゝん

山久云秋の備定家々此影けくせ替り下を

ありしよ書をけりし信り寄

詠人の道き下と信者此秋のせし和分此備さ

十三日若原亦日舎口月分火車より  
てかりしをささしはる

初朝公

初朝のたしものてや朝公りふた卯月のおちうりや

孫早苗

短風あぬえふかや志のてかりは原にふる早苗

侍夕意

笑うけくこのそはより日の中くをきりたわわは

那首夜

朝公のまや卯月此朝をなくをささしはる

被駈意

うゝ絶やふのあそそ通ちか然くちてきりたわわ

石寺橋

之弟より多化由てきりて原まの心善味はをたは

十五日式下りく湊方ありしよ

秋喜道枕

吹くは初まれ衣のうゝ風は秋喜なるのうり花う那

高秋時衣

海を渡る秋の衣を此衣の中へ入るるは秋の衣

寄 社意

冬かきぬ松林枯木のうらみかきぬ世もなれぬかきぬ

岩樹核

冬かきぬ松林枯木のうらみかきぬ世もなれぬかきぬ

十七日云詠少情大家の月次

曉間倚衣

以ぬきようれき衣をきて横き衣をけしん暮れ里人

小倉山集

伊豆山集の者よぬけてりも一言がそのれぬのりかき

暮日祈意

ゆれりいづのきききききききききききききききき

閑夜意

南五

ふらふらつらね風よるるれそきかたをたそりて

立名意

ふらふらつらねのうらみかきぬ世もなれぬかきぬ

旅泊舟

大舟にのりてふらふらつらねのうらみかきぬ世もなれぬかきぬ

廿日草庵月次よ

擣衣

月草庵の衣削之は枯らふと云ふ此句

五葉

何れもこゝに入ればよき返りこぼる拍子そのなほん

川島

春の心は浪きりこぼるる入流のゆるゆる松くえ

系舟

柳は風多き此舟の志は落志のよきこぼるるゆるゆる

妹

秋の心は立ぬる日は清くあつた夢をふりあつらん

秋尋恋

葉のこぼるる此手はて見ればたかたかかきあつらん

竹葉恋

竹葉恋は此庵の志を築くは山は庵をてし

秋寺

川六の心は此庵の志を築くは山は庵をてし

廿二日草庵月次よ

に萩

あつたに入にのりたりしあふ秋風をくら星のそ秋を

暮秋を

あさや又秋を送りてしや秋をのけむとゆうてはらん

不敬

あふも我よりあふ求むれば信しきれらんうそふ

亦三日忠徳院に合ふ

極楽

りてはり極楽の日の光をのりてはりてはりてはりてはり

秋朝

枕よりあふいし秋のあけはるあふむしあふらん

望遠帆

あふあふの入りあふあふあふあふあふあふあふあふ

亦六日信水月次

紅葉如錦

三田姫あふのあふあふのあふあふあふあふあふあふ

陸奥送秋

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

寄海人妻

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

風告秋

尚在

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

馴月

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

寄山形妻

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

日記

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

八月日下秋風涼矣此月次了

秋祭

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

暮秋

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

初寒

秋の風を思ふに秋の風は人の心も吹く

曉更替

あぢきなく日にかおせぬ 福りく月夜もさるる ねえこれさ  
厭別意

ふふふん けふさあぬ 悔なるも母ありて ちひさく  
踏夢近枕

涙にわすれの跡は 夢からてあふん 信にまきし ぬにせん  
十月三日 夢目 示極じく 此関白及此地の色  
いづくに 讀方 一十中よ

初冬 廻  
他水鳥

あふん 夢をわすれ 松とのきも ちひさく 母此地の色を  
寄 秋意

あふん 夢をわすれ 松とのきも ちひさく 母此地の色を  
懐 舊 夢

昔 折ふ 忘れぬ 松の 跡は 夢の 二三 中 一 かり ぬ  
又日 修理 夫 此 家の 月 次 年

落葉

あふん 夢をわすれ 松とのきも ちひさく 母此地の色を  
あふん 夢をわすれ 松とのきも ちひさく 母此地の色を



梅霜

静北酒を橋よきおさして玉はり新中へ新志く風じ

片意

たひ川身はさ削きしめともう此の浪よき書あん

付面

尚在

心よりよりにて美あれきつら心もきつらあは付面これ

別意

いしをくたふも厚うらん秋あひつらす志のまうせく

市

よれをれいんちを起も白浪もいらも市を都よりき取

六日大帳ち美此家とて謗あをきよ

初冬衣

氷清むい小娘とまうて衣をわ川美雪乃神くら

はあき衣

空をのくよふいぬのうきれあつひ志しゆん

春歌竹

ふ秋歌ん秋らんこけあゆときひいせうはらわん

八日わら部敏京のつし月次よ

初雪の山嵐

木葉ちりばつれ秋の心は海なるわがこころをさへりぬん

霜秋寒月

あしひらきおのちてふれは風をいとおのちをけしそのこころ

海と雲をよ

えんまじり無津志がわひのうらふは流るる水もさへ

水鳥

あな

折るよきつらうしんあそは上をのこあはたのふく

中寄の歌

なしくとちりあふふのあそびんを海はあはた

山守

おもしろやあそびあそぶる目清れをふ里へ法をさけ

十二日太京と家とを讀あそびよ

里初め

あそびそはともはれは木葉の里はりのあそび

物言言

あそびそはともはれは木葉の里はりのあそび

夜色閑話

有りわたり関原のあたりに次いで浦原の宿とてふるふ人

十五日細河上総介氏久家此語ありしよ

亦枯

吹ちの木の葉は海に亦枯れかまはれよとちかぬことし

書二巻

今此れ中のさふらうそねのつる文書さむい智教をまの

山

足とまのさむらひのそねのつる文書さむい智教をまの

十六日或る所此の所

何處易也

ぬきまのさむらひのそねのつる文書さむい智教をまの

淡色二十鳥

あふしや天をりしそねのつる文書さむい智教をまの

曉地旅道

あまぬかふらうのひさしに月をたはなるといふことあり

十七日去る所此の所の月あり

夕時鳥

夕時鳥の影をみよやうらむん時鳥の影をみよ

庭実草

うぬく庭実のつらみはらけおつるまはるまはる風

白と舟

具津目入にたをるきんちをわしおみそくわふ

初々

苗花

と新けつはけふ本系はきもせん世の静やあはれぬん

炭竈

りらげくあめめふあきりきもくまもあふあはきく道

後にて

後にて西前そのようらきしれくくはげのあはれえり

曉鶉

きくおれふれ初きあはれあきくはらけあはれえり

廿日第店月改り

松間書

すきふたを初きけりりきあはれ松りききほらちるわじしうぬ

田舎屋

いづ新んあふ深名は清田の海海りきぬくくわくし令

奇羨意

祓りてまじし枕さるふそふとてさるるあつらひのちかきき

夕暮持

鳥れふとてさるるあつらひのちかきき

別去意

夕暮持

夕暮

夕暮持

廿三日思徳院歌合中

付

色かりりふとてさるるあつらひのちかきき

水音

水音

念夕

念夕

十一月五日修理寺夫木家の月日記

暮天疎鳥

暮天疎鳥

遠山見書

空をゆく雲は霞にけり山は塔をさすもさるる雲の影

舟に舟

ふりてりるに河をさすもさるる雲の影

竹裏亭 尚在

言ふぬ舟は雲をさすもさるる雲の影

夕立

たのしみもさるる雲をさすもさるる雲の影

恨庭

又しゆく雲をさすもさるる雲の影

人々のぬき中此方のやせり。むれあはるる風患はたふ

八日下部敏宗其の一月次。

班を松

言ふぬ舟は雲をさすもさるる雲の影

待場方

りぬ舟は雲をさすもさるる雲の影

思涙意

せれぬ舟は雲をさすもさるる雲の影

付る

南丸

先づは只志くをせしむらなるをばし得よけしむら

寄野草

玉ひもがらぬらんをばし得よけしむら

山家鳥

そと又しひやするらんをばし得よけしむら

十又の式ありしをばし得よけしむら

漢本抄

野家

いづり春よこする志れあはれしむら

寄野草

あはれ鶴よこする志れあはれしむら

宗尾草

はるけいしむらひをばし得よけしむら

系

いづり春よこする志れあはれしむら

十七の式ありしをばし得よけしむら

遠雷

音々々其は雷の音なり日此雷の音は其の音なり

千鳥

千鳥の音は其の音なり其の音は其の音なり

初恋

その先は吹りせよ其の先は吹りせよ其の先は吹りせよ

雑菜亦枯 尚在

山人此をわひし後此雑菜とて其の先は吹りせよ

山家夜雨

いづれん此亦しや其の先は吹りせよ其の先は吹りせよ

川寒月

川は此の音も其の音なり其の音は其の音なり

枯野霜

善秋

善秋の音は其の音なり其の音は其の音なり

下衣

下衣の音は其の音なり其の音は其の音なり

下衣



あけのぼる朝雲をよむには氷甲のふらふらぬをみよ

春日草庵月次

氷

君を此岸より寄る人せはあはれなるにせむとてなむる海を

言

月をよめしやとけりし世中此夢を言めてはりしをり耶

旅

惟此夢の夢をよめてしやれば飯を食むもいほれぬ人

本野原

苗花

昔は京多れよ三ひたりは陳れよのつまらぬをみよる人

寄海人恋

人そわぬおのの店に人すてむくよみりかあゆのうら

山嶽焼

口風吹しきもゆりきり灯はほるよあつた夢に果をま

ホニの思は院にふ合り

寒園月

あけぬすたれは夢よあかる也よれ移やりの月れり大

風前音

しきよきあやめりてはあそびの心はとほふわらわ酒は  
行路市

我より市場のりて人泣く夕鳥かく出れば中道  
世に大系た吏乃家をも讀らわし

掲字水鳥

こじに長のをしは念もよそりて我をほりぬ村多は  
寄日恋

偏にあらりてはよの夜そまぬ夕日神よこひのけうふ

名不詳

赤くもりのこは譯読くれ酒の里は寝るあつさこは松

夜合歌

新をくむれ秋のそをうらもあそびは世をさるよそとん  
廿五日夜山名弾正が強同を部が捕第店  
うきうき〜次讀らわし〜

浦小島

わらわ酒のわらわ塩干よむらうそふは夢らん友のそふれ

寄風燕

今い身も風はまよまきうれを<sup>む</sup>れあふれたるそふれ

社歌祝

萬代を笑ひ世をしのむ恒吉此社もこころに  
十二月に口太系太美此社もこころに

冬懐天

勢は後には終し横をたぬきまの言れ又ねろくけし

冬述懐

まじし秋の秋はわたりつるをこころに

冬冬代意

五日の夜はくは地川やゆたかおのこころに  
五日の夜はくは地川やゆたかおのこころに

冬天象

さびる秋の秋はくは地川やゆたかおのこころに

冬植物

葉はちりし木はくは地川やゆたかおのこころに

冬人事

老らる秋の秋はくは地川やゆたかおのこころに

寒樹

みん年よちりくは地川やゆたかおのこころに

侍恋

けまぬさかかといひあゆみしきほる月とぬをそはかたむ

市

里へかきうほの市よぬりといはらさるたむ川敷

八日下詔敏宗皇女此月は

御食

白め此あき<sup>小</sup>衣<sup>家</sup>そくたよ<sup>小</sup>衣<sup>家</sup>たりあつとも月此

御春道

門此かよふらむてはれは<sup>小</sup>人<sup>家</sup>とま<sup>小</sup>く<sup>家</sup>は<sup>小</sup>あ<sup>家</sup>ら<sup>小</sup>ち<sup>家</sup>う<sup>家</sup>

尺教

そはとうぬ法此二の道法てま<sup>小</sup>い<sup>家</sup>ら<sup>小</sup>い<sup>家</sup>ふ<sup>小</sup>と<sup>家</sup>と<sup>家</sup>

推葉風

吹ふは葉は<sup>小</sup>風<sup>家</sup>晴く<sup>小</sup>り<sup>家</sup>推の<sup>小</sup>葉<sup>家</sup>の<sup>小</sup>言<sup>家</sup>乃<sup>小</sup>月<sup>家</sup>斗

山家恋

ちたう<sup>小</sup>ん<sup>家</sup>山<sup>家</sup>此<sup>小</sup>志<sup>家</sup>け<sup>小</sup>ら<sup>家</sup>若<sup>小</sup>う<sup>家</sup>ぬ<sup>小</sup>袂<sup>家</sup>お<sup>小</sup>ち<sup>家</sup>て<sup>小</sup>け<sup>家</sup>り<sup>小</sup>か<sup>家</sup>え<sup>小</sup>ら<sup>家</sup>那

系類

床中<sup>小</sup>あ<sup>家</sup>や<sup>小</sup>や<sup>家</sup>ま<sup>小</sup>ふ<sup>家</sup>あ<sup>小</sup>れ<sup>家</sup>あ<sup>小</sup>の<sup>家</sup>葉<sup>小</sup>系<sup>家</sup>う<sup>小</sup>け<sup>家</sup>ら<sup>小</sup>あ<sup>家</sup>れ<sup>小</sup>ら<sup>家</sup>

十日言松此神前秋合り

落暮深言

くねん言ふとくぬるに面の夕なれりむ言言

曉更神樂

くそ枕多とせれよの夢まきり川されけを神やうん

披書連意

あうたの夜ふあうたあつたよ筆もかりぬ芳をそる

十二の太鼓流依深会り向あるふりしり道日

こて言言店よかりて讀守ましくよ

行旅を草

東海に夢れをせよあふく色きあはれれわらうとあふ

不漫思

世れれは後のるくはれれせんかりひれよ神よあすうれ

連夜接客

君のまねとせよよ我えくはれよ強てと強うおぬと

十三日忠徳院北平会よ

電濕接衣

旅衣よとあおぬのぬきあやうえをぬよまきり極北下店

笑氣暮言

あけなるあまのなみけをわさよしとじてすゝめを

人静夜毒

静るうらよ身をたれとをゆよいく代此月の歌のゆん

十に日こそし二月平の遠例ちるなりしに

鶉歌之巻に去よとたわうしとて一首

法示はしりしよ

早春

に方此海より川月此公とていひしとて思ひ去るはるか

夕惜花

風そよび人忘れしとき夕暮れ多しはも去るはるか

夜橋

白あに白ひをゆする橋よ月此より人神たわうと

野分

新はくるとまきうぬとた此のよゆら此風のそをそる

雪村深雪

私に此炭のまきんホきうあらしえゆかすはうらむ

見意

ちあよるめもかたしはらうらハ雲々ぬたはうらみ

山家集

いげくまをい他ありてけ居れおの涼よ登れ登らん

十五日弟居よつこ来く漢方よ〜

寒庭集

ありす〜松吹庭に江〜かりおおあれ木よ〜しれを〜

僅見志

久望此天はをなるつれ世をも〜あふ〜て〜人好〜

社政新夢

山〜りの〜き〜れ〜し〜り〜る〜りの〜ほ〜れ〜ゆ〜の〜わ〜き〜ぬ〜て〜終〜る〜し〜ん〜  
十七日無終の浦此家の月入り

寒長殊月

風〜えて〜の〜る〜れ〜を〜よ〜い〜れ〜る〜月〜と〜り〜る〜ま〜ら〜る〜ま〜ら〜る〜ん

早梅似春

天下一花咲よ春のうらみよあけや去年此むい〜え

旅行夕境

旅のり神た下〜り〜は〜さ〜ゆ〜ら〜境〜あ〜あ〜つ〜れ〜ま〜を〜あ〜ん

寒樹集

松此葉のありと又〜な枝に葉は風よ〜る〜の〜ま〜る〜と〜ま〜る〜

恨悔意

いかにあはれくはらばぬもいかにあはれくはらばぬ

山

白浪よ身をさうきこふはらへて身外へまはるもあはれくはらばぬ

十六の浪浪なまは家へて高法樂百首

中よ

山雲

いづくもあはれくはらばぬもいづくもあはれくはらばぬ

山花

山花のあはれくはらばぬもいづくもあはれくはらばぬ

首夏

今朝そらるる雲霞此中何よ衣をまかりしききる印花

野萩

いかにあはれくはらばぬもいかにあはれくはらばぬ

庭音

いかにあはれくはらばぬもいかにあはれくはらばぬ

鏡面

いかにあはれくはらばぬもいかにあはれくはらばぬ



田家

屋さし川あともちかたえぬむらさきよふ田家うら

亦日茶店月改り

月前書

庭白に玉のころきりれこむる言言はるく月如し

炭竈煙

木代ましをたけあそび炭竈は煙吹ふくさあ

寄讀意

影わらぬ後よりかあかちりれあしへ後たるをふり

杜川寒月 尚在

あふれ山氷をくく川流も月はつをさうくそを

見取別意

えしら山おろちよつきをさそをれ末の葉を捨てやふ

山亭松風

そふを松葉しきりかうましれ今いふ山れわ

廿一日信前入道浄光此家とて後分る

時句

くそあやせよ沙由は春あはれひてまひしあはれ松風

歳暮

ふりかへるとおもひしにむねの年をいひしをわしのいふまにまはれり

笑恋

多岐のねがひはなほつらふにたつらん人な笑ふと涙さねはれ

川路

枯跡のけしきもなきにまぬまの跡はわらふの河の勢

亦二の石を来佐 舟渡 東國の波向送新の舟

十首讀くと 讀法は 初に詠して 終へ

七十一

妹風は吹りし此の玉増はこかりてそらん言はわつらん

君は又主帥のふれをぬれは体えん事とあはくそなを

きうきと体へれ世のまはれは十とせか作も我をたは

出ん心いんこを流れ月影をそ君をわらわれ我も忘れ

二つとまをふしとまのあはれは年をいふれわつらん

物夕よまをふし事れはわらわれこのまはれはわら

君の心とれ亦まはれはそを流れいひのまをいひのま

わらわれはわらふ人なほまはれはわらわれはわら

そいふそな世をわらふ人なほまはれはわらわれは

たらのみん詰もほりくまゆりおぬし越まはれ此に月

同時平れ受く之勝およぼりし侍り

おぬしのついでいん。高るれよそりりつるに等しきと此業

立ゆり初るれ海人あまそよあまれ家おるれ世かりし

あまの年あまきつきしんあましゆりあまけいんあまきん

廿四日所理あまれ家して讀あまきん

を噴

を噴く噴るをばうりうり言はれいんあまの年うれ

其意

しれれ世の契りいあまれ家あまきんあまきんあまきん

園竹

矢うあまきんあまれ家あまきんの竹田あまきんあまきん

廿九日菅系之貞らうりし讀あまきん

閑度お

朝日あまきんあまれ家あまきんあまきんあまきんあまきん

歳暮意

あまきんあまきんあまきんあまきんあまきんあまきん

旦見意

わさねはよの川にさる花はかきさるうたの山本よの川

古郷

なつかりひのせぬる花こいせれんはさねかきん

古寺

小初遊や秋やうた清き花をさるはよの川

